



作文2部

のうりん すいさん だいじんしょう
農林水産大臣賞

馬ま鋤がら洗い

群馬ぐんま県けん大泉町おおいずみちょう立南たちみなみ小学校六年

永島ながしま 琉楓りゅうふう

毎年五月になるとぼくの周りはあわただしくなる。父はいつも通り仕事に出かけ、母は毎日朝早く家を出て実家に行ってしまう。でも必ずおにぎりが握ってある。おかずはいらぬ。ぼくはこのおにぎりが好きだ。甘くてふわふわのおにぎりをほおぼり学校に向かう。いつのまにか忙しい時期のぼくの日課となっていた。

ぼくは小さな頃から母の実家の手伝いをしている。母の実家はコメ農家だ。その歴史は古く江戸時代から続いている。祖父から叔父が世代交代してから担い手のいない地域の方々から耕作をお願いされて東京ドーム約六個分の規模まで大きくなった。母も四年前から仕事を辞めて手伝っている。

毎年五月から田植えの準備がはじまる。数千枚の苗箱に種まきをして苗床に並べる。単純作業といえば簡単そうに聞こえるが決してそうではない。土、肥料、水の量を絶妙に調整しなければならぬ。田には麦が刈り取りの時期を迎えており、麦刈りをしながら田植えの準備をする。朝から晩までとにかく忙しい。六月になると叔父は水路に水がきているか確認しながらしろかきをする。あとはひたすら田植えの作業。

毎年七月の初旬に田植えが終わると田植えに関わった人を集め

てえん会を行っていた。ここ数年はコロナの影きょうで自しゆくしていたが今年は久しぶりに開催した。えん会の前日叔父がぼくに「明日のまんがらいよろしくな。」と言った。まんがらい。初めて聞いた。辞書で調べたが出てこない。聞き間違えか。ぼくはものすごく気になって仕方なかった。

まんがらいという名のえん会が始まった。今年もたくさんの方が集まった。祖父に聞こうと近づいたが他の人たちの話りが盛り上がっており近づけない。目の前にある色とりどりの食事を食べながらタイミングをうかがっていた。楽しい時間はあっという間に過ぎた。ぼくはまだモヤモヤしたままだ。まんがらい。楽しく話している祖父に聞いてみた。「じいちゃん、まんがらいって何？」すると祖父は昔の田植えの話始めた。今では種まき、田植え、稲刈り、もみすりは殆ど機械で出来るようになったが、昔は人の手でやっていた。人の手と言っても馬や牛の力を使っていたことを教えてくれた。田植えの前のしろかきでは馬に馬くわを取り付けてその上に人が乗り別の人が馬を引いてしろをかいたと教えてくれた。田植えがいち段落するとその馬くわを洗い清めていたそう。その日は農休みにして集落ごとに集まってえん会をした。まんがらいとは漢字で書くと馬、鋤、洗いと書く。なぞがやつとつけた。

小さい頃から恒例になっていた初夏のえん会は昔からの風習を現代に残した歴史あるものだとして初めて知ることができた。来年も田植えを手伝い皆と馬鋤洗いに参加しようと思う。